

Title	英訳本Gesta Romanorum (Harl. 7333)における Inversionについて(その2)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.151-p.174
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80358">https://hdl.handle.net/11094/80358</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 英訳本 Gesta Romanorum (Harl. 7333)

### における Inversion について (その2)

金 山 崇

§ 4 特定の副詞や副詞句が頭位にある場合や、ある種の節の頭位にある接続詞に続く場合に、転倒が見られるので、以下、個々に、どのような条件のもとで、この現象が起こるかを見ることにする。これらの副詞(句)は、先行文脈とのつながりを保つための接続詞機能をもつものが大部分であって、それが惹きつけるものは述部動詞であるから、頭位に来る語句の次に続くのはどのような動詞か、また続く主語はどのような種類のものか、ここでは単独の述部動詞の場合を中心に調べ複合動詞の場合は、最初の助動詞に必ずしも主語がすぐ続くとは限らないなどのことがあり、くわしくは別の機会にゆずることにした。なお次の(1)(2)(4)の場合は考慮に入れない。

(1)非人称構文、(2)通常の命令文(主格のない場合はもちろん、あっても必ず動詞に後続し、転倒となるから)、(3)頭位にある副詞や副詞句と述部動詞(非転倒の場合は主語)との間に他の副詞や副詞句が来れば、その頭位の語句が後続する主語・述部動詞の語順に及ぼす影響は、その介在する語句のために非常に薄くなるかまたは絶たれる、と考えられるので、その介在する語句を頭位とみなし、その項で扱う(e. g. *And thenne anoon he sent a messag to pe Emperesse (312)/And penne withowte dowte we shull ende faire(7)*), (4) (3)と同様な状況だが介在するものが分詞構文や従属節である場合(必ず非転倒である)(e. g. *Thenne the Iuge hering his resonabill and his wise answeris, he(=the Iuge) mygt zeve no dome (11)/At pe laste, whenne pe Emperesse sawe pat he wold not be corectid, ne amendid of his foly, she callid to hire iij. or iiij. worthi lordis(312)*)).

§ 5 §4に述べた副詞のうち、ここでは‘then’を扱う。転倒例は238件、非転倒例は334件で、比は42%に対し58%、と2:3の割合で非転倒になる率がやや大きい。非転倒例のうち、述部動詞が転倒例のそれと共通している件数は165で、これに限って考えれば、238:165、59%と41%になり、先ほどの場合とちょうど比は逆の3:2となり、特定の述部動詞にあっては転倒になる率がやや大きくなる。先の334件より、この165件を引いた残りは169件で、これは転倒例のうちに対応する共通の述語動詞がないものである。以下、238:165の場合の対照的な例文(対照的な例が非転倒例中にないもの(10)(11)(12)もある)を挙げ、次に非転倒のみに現われる述部動詞を列挙し、最後に、これらに関する統計数字を表示して若干の帰結を見出したい。

(1) *Then seid the Emperour to pe lady, “goth ye forth...(83)/Pen*

- the Emperour *seid*, þat sat at the table, “sey, lorell knave…(80)
- (2) *Thenne spake* þe lewde knyȝte, and saide, “sir he is gilty…  
(21)/*Thenne* þe wise knyȝt *spake*, “If so be that þou wolt do…  
(20)
- (3) when he comyth to þe deth with pacience, þen shall he be a  
kyng in heuen(71)/if ony woman, &c. scil. If ony sowle, þe  
which is spouse of god trespassid in avowtrie, scil. In eny dedly  
synne, *Thenne* hit *schuld* be demyd to perpetuel prison of hell.  
(13—14)
- (4) And þenne comith a toode(18)/But *thenne* þe serpent comyth  
agen, scil. our lord, whenne…(19)
- (5) when he takith no kepe of god, and hath no meyne, þan is  
hit to þe man checkmate. (71)/*then* hit is no charge who be  
above or who be byneth(71)
- (6) *Then answerid* þe stiward, and saide(282)/*Thenne she answerid*,  
and saide(269)
- (7) *then thought* he, “I wote wele my felawe…(73)/& *thenne* she  
*thowte*, “lord! yf I wer now wher that I was to-day!”(188)
- (8) whenne we wer all childryn of perdicion…, *Thenne sent* god  
adowne his owne geten sone to delyuer vs (32)/And *thenne*  
Gwido *sent* down þe Roop agen.(283)
- (9) *Then cryde* the Emperesse with an hye vois, and saide (319)  
/ *Then she cryde* with an hye voys, and saide (315)
- (10) And *thenne lieth* the yowth in derknesse of synne (8)
- (11) and *thenne become* the Empire into the hondes of his sister  
(256)
- (12) *Then ros* vp a grete tempeste(303)

上の例文に見られる述語動詞を列挙する。括弧内の数字は当該動詞と共に用いられた主語別の件数を示し、代名詞・名詞の順であり、上段は転倒例の、下段のは非転倒例のそれである。以下(13)(14)ではここに列挙する以外の非転倒動詞とその主語の別を示す。便宜上、現代綴字で原形を用いた。

- (a) 自動詞 : answer(0—1), be(3—1), become(0—1), come(0—5)  
(2—4), (5—12), (0—0), (1—6)  
lie(0—1), rise(0—1), speak(2—9)  
(0—0), (0—0), (0—1)

(b) 他動詞 : answer(2—1), cry(0—1), say(70—104)

(0—1), (6—0), (27—14),

send : (0—1), speak(7—13), think(2—0)

(1—5), (0—3), (3—1)

(c) 複合動詞形 (v(s)Vなど)(7—6)

(55—18)

(13) 自動詞<sup>1)</sup> : awake(0—2), blow(0—1), bow(1—0), die(0—1),  
enter(1—2), fight(2—0), fall(0—1), go(6—7)<sup>2)</sup>, grant(1—0),  
incline(0—1), kneel(2—2), look(4—0), marvel(0—3), meet  
(1—1), ride(2—0), rest(2—0), run(2—3), sorrow(1—0), start  
(0—1), turn(2—1), weep(3—2), write(0—1).

(14) 他動詞 : ask(4—3), array(1—0), begin(3—1), behold(1—1),  
bid(3—1), bequeathe(0—1), besiege(0—1), bring(1—2), bury  
(1—0), call(1—3), cast(1—0), charge(0—1), comfort(0—1),  
command(0—1), conclude(1—0), counsel(1—0), covet(1—0),  
deliver(2—0), draw(1—0), enquire(0—1), find(1—0), flee(0—  
1), forgive(1—0), give(0—1), grant(1—0), hang(1—1), hate  
(1—0), have(1—3), hire(1—0), hold(0—1), incline(1—0),  
know(1—0), lay(1—0), let(0—1), lose(3—0) make(2—4), naked  
(1—0)<sup>3)</sup>, occupy(0—1), open(1—1), owe(1—1), pray(0—1),  
put(1—0), reprove(0—1), see(2—1), seek(1—0), sell(0—1),  
show(0—2), slay(2—0), smite(0—3), sue(1—0)<sup>4)</sup>, stir(0—1),  
set(0—2), take(7—4), tell(1—3), throw(0—1), turn(1—0),  
wash(1—0), yield(0—1)

上の(a)(b)(c)の動詞例のみに限って、主語別に見ると、転倒例では代名詞86、名詞139、複合動詞形(v(S)V)では代名詞7、名詞6であり、非転倒例では、代名詞45、名詞47、複合動詞形では代名詞55、名詞18となる。また動詞の別に見ると、前者では自動詞24、他動詞201、複合動詞形が13であり、後者では自動詞31、他動詞61、複合動詞形73である。このように見ると、say, speak, come, be, answer, think, send, cry, lie, become, riseが述部動詞のとき、主語が

1) 代動詞do(2—0)は除いてある。故に(13)(14)では自動詞59、他動詞110、計169(実際は171)となる。なお、便宜上原形を挙げ、現代綴字になおした。また括弧内の数字は主語別の件数を表わし、代名詞、名詞の順であるのは(a)(b)(c)に同じ。

2) 過去形 yede の場合も含む。

3) nakid (=naked) の原形。

4) sue=pursue.

代名詞(86:45)であれ名詞(139:47)であれ、共に転倒に傾く方が大きいし、動詞は自動詞(24:36)ならば非転倒に向い、他動詞(201:59)ならば転倒に向うことになり、又複合動詞形(13:73)ならば非転倒に傾く、と言いうる。

しかし、(13)(14)を算入すれば、非転倒の部には代名詞87, 名詞82, 自動詞59, 他動詞 110 が加わって、表 1 のようになる。これに依れば、主語については、代名詞の場合に非転倒への傾き

	転 倒	非転倒
代名詞	86	132
名 詞	139	129
自動詞	24	90
他動詞	201	171

表 1

が大きくなり、動詞では依然として他動詞の場合に転倒へ向う傾向が強いが、前の201:59ほどの著しい傾きはなく、自動詞の場合に非転倒となる傾向が前よりも大きくなっている。

ところで、次に扱う‘po’にも通じることで、伝達動詞‘quod’は、常に主語に先行して転倒の語順を起こすことは §3 に述べたとおりだが、いま仮に、複合動詞形を除く単独動詞の転倒例

225 のうちで、伝達動詞の大部分(205件)を占める‘say’と‘speak’を、‘quod+主語’の型にならう傾向がある、またはこのテキストのひとつのマンネリズム(対話が多く用いられているからであろう)<sup>5)</sup>と考えるなら、上の数字からこれらを別枠として引き去った方が、より真相に近く、転倒・非転倒の条件が見られるのではなかろうか、と言うことである。

そこで、‘say’(174件、主語は代名詞:70, 名詞:104)は全部他動詞として用いられているが、‘speak’(31件、主語は代名詞:9, 名詞:22)は自動詞用法は11件(主語は、代名詞:2, 名詞:9)で、これを除いた残り20が他動詞であるから、 $174+20=194$ を引けば、上の表の転倒の他動詞は7になり、主語も代名詞は $70+7=77$ , 名詞は $104+13=117$ をそれぞれ引き去れば、9と22になる。一方、‘say’や‘speak’に非転倒例として他動詞用法があれば、上の‘quod+主語’の型またはマンネリズムに反しているわけだから、非転倒例からそれらを引き去る必要がある。

‘say’44件(主語は、代名詞27, 名詞17)は全部他動詞用法で、‘speak’4件(主語は名詞のみ

	転 倒	非転倒
代名詞	9	105
名 詞	22	109
自動詞	24	90
他動詞	7	124

表 2

で4)のうち自動詞用法1件を除く3件、がこれである。すなわち代名詞27, 名詞 $17+3=20$ , 他動詞 $44+3=47$ を除くわけである。表1の数字は表2のように変わる。

つまり、‘then’が頭位に来る場合、‘say’‘speak’という伝達動詞を上述べた理由から除去してよいとすれば、総じて主語の別、動詞の別に拘らず非転倒となる傾きが絶大となる。ただ

5) 話者が変わるたびに、その identity を明確に強調できるよう、転倒の語順で後位に、主語(=話者)を置いていると考えられる。‘say’‘speak’は次の例文に見るように、大部分は直接話法を導入するのに用いられ、‘quod+主語’は、いったん導入された直接話法文が切れて、次に始まる中間に置かれるのが殆んど全部である。例: *Then saide Fulgencius*, “sir, I beseche you hertely to telle me soome goode conseil and helpe in pis cas.” *Thenne saide pe stiward*, “if thow woll do after my conseil in pis cas, I shall bryng al to good ende.” “ȝis, sir,” *quop he*, “pat I desire nowe bifore all thinges.” *Thenne saide pe stiward*, “... (323)

し名詞主語であり、述語動詞が自動詞であれば、なおいくばくか転倒に向う可能性があり、複合動詞形であれば非転倒に向う傾向が強い、と言えるであろう。

複合動詞形では次のような興味深い文例が、ただ一つであるが、見出されたことをつけ加えておきたい。

例 : but yf the holy gooste passe oute, & fle away fro synne, *pen*  
*is* alle the see, scil. al the worlde, *is troubelid*, & whi? (108)

つまり、‘then’ が頭位にあるのでいったん転倒の語順をとるが、主語を説明し直したために、助動詞*is*が先行しているにも拘らず、その説明用の語句を頭位にある主語として新しく陳述しなおし、本来、過去分詞 *troubelid* が続くべきところに、‘then’ の影響を離れ不要な助動詞*is*を重ねることになったと考えられる。また偶然同一語句が近接した位置にあって、次のように「変化」を狙ったと考えられる相反する語順もある。

例 : but when þe brid fleethe oute a-vey, *then* al þe see *is I-trou-*  
*belid*... (7行おいて下に) & when she(=bird) perseyvithe hir  
(=the bird’s enemy), she fleethe, & *pen is* al the see *I-trow-*  
*belid*” (106)

§ 6 ‘po’(=then) が頭位に来て起きる転倒と非転倒は、それぞれ18件、24件で、全体として、非倒置へ向う傾向がある。転倒・非転倒に共通して見られる述部動詞、およびそれと共に用いられる主語の別による件数を括弧内に示せば次のようになる。上段は転倒例での、下段は非転倒例での件数であり、代名詞・名詞の順である。

- (1) 自動詞 : come(0—1), go(1—0)  
(2—0), (1—0)<sup>6)</sup>
- (2) 他動詞 : say(0—9), speak(1—3)  
(3—1), (0—0)
- (3) 複合動詞形 (v(S)Vなど) : (1—2)  
(1—0)

	転 倒	非転倒
代名詞	2	6
名 詞	13	1
自動詞	2	3
他動詞	13	4

表  
3

次に、複合動詞形を除いて、これを表にまとめると、表3のようになる。

これで見ると、主語が名詞で他動詞の場合に転倒へ傾くことになるが、‘say’ ‘speak’ については、‘then’ の項 (p. 67) で述べたことがあてはまるとして<sup>7)</sup>、ここでも同様の操作を加えると、表4となり、主語が代名詞である場合に転倒に傾き、自動

6) 過去形 *yede* を原形にしてある。

7) *po quod* the kyng, “it is good... (50) も参考になる。

	転 倒	非転倒
代名詞	1	3
名 詞	1	0
自動詞	2	3
他動詞	0	0

表  
4

詞の場合は非転倒へ向うと言える。ここで更に転倒例中に相対  
 応する動詞をもたない非転倒例を加えると表5のようになる。  
 まずその動詞を§5の要領で列挙する。

(4) 自動詞: descend(0—1), draw(0—1), fall(1—0),  
 turn(1—1)

(5) 他動詞: ask(1—0), begin(1—0), have(0—1),  
 make(0—2), marry(1—0), proffer(0—1), take (1—  
 1), think(1—0), wed(1—0)

	転 倒	非転倒
代名詞	1	11
名 詞	1	8
自動詞	2	8
他動詞	0	11

表  
5

つまり、伝達動詞 ‘say’ ‘speak’ が ‘quod+主語’の型、また  
 はこのテキストのマンネリズムと考えてよいのなら、‘po’ が頭  
 位に來た場合、数量的には圧倒的に非転倒に向うものとしてよ  
 いが、なお詳しく言えば、主語が代名詞で、動詞が他動詞の場  
 合に非転倒に（逆に言えば名詞主語で自動詞の場合に転倒に）  
 向うと言えるであろう。更にまた、複合動詞形にあっては、転

倒と非転倒とは同率と言える。参考までに対照的例文を挙げる。

- (1) *Tho seid the Emperour, “doughter, ... (49)/And tho he seid to  
 the thrid doughter, “how moche lovist pou me?”(49)*
- (2) *and po was all the ligt agon(8)/tho he was browte to him(190)*
- (3) *And poo come the thirde knyght, and spake, “...(93)/Tho he  
 cam to pe secund(48)*
- (4) *Tho went he ayen to his lond (91)/and po he yode to the  
 cradill(99)*
- (5) *Tho spake pe wise man, “loo!...(20)*

§ 7 頭位に ‘there’ が來た場合に続く be+不定主語は、枚挙にいとまがないくらいであるから  
 数えない。その他の動詞のときの転倒例は、93件、非転倒例は41件である。転倒例の頭位に來る  
 ‘there’は例外なく、いわゆる虚辞と見なしてよいものであるが、非転倒にあっては、‘there’ はす  
 べて「場」の意味をもつ、という違いがある。前者では、主語は名詞90・不定代名詞 (none) 3、  
 後者では代名詞40で名詞は1に過ぎない。動詞については、前者では自動詞が66、他動詞はわずか  
 2、複合動詞形は25であり、自動詞と複合動詞形の占める割合が圧倒的である。後者では、参考  
 までに述べれば、自動詞7、他動詞30、複合動詞形4で、他動詞の占める割合が大きい、これ  
 はこのテキストだけで見られるのであって、他の動詞（形）が逆に多くを占める場合も表現手段  
 の必要度により考えられるわけである。ただ、偶然かも知れないものの、後者に代名詞と他動詞  
 が多く現われていること、前者に名詞と自動詞が多いこと、は転倒になる条件として、これまで

扱った ‘then’, ‘po’ の場合と一致してるのは興味深く感じられる。参考に例文を掲げる。

- (1) 転倒例 : Rome, In the empire of whom *per* was a knyzt pat hadde weddid a ...(1)/Whan he was ded, *per* come a knyzt, and spoiled me of my virginite(23)/Whenne the Emperoure harde pat, anon *per* toke him an infirmite (250)/the knyzt was so mury in herte, that *per* cowth no man telle it (265)/when pe day come, *ther* was ordeynyd a grete feste (272)/if we set fire in pe cite, anon *pere* shalbe made a cry (63)/at the last *pere* was oon yfounde ... pat was sotill in crafte (67)/“sipe ther is non pat wolde seye it, ne noon accuser is I-founde, *pere* shalle noon be dede(155)
- (2) 非転倒例 : he Enterid in to your foreste, and *pere* pe forster kit of his tayle (150)/he lokid afer, & *pere* he sawe a fair place; and thidir he went & set him adowne in the myddis perof. And as he was ther sitting, ther come two faire ladijs (114)

§ 8 頭位に ‘here’ が来て転倒する例は多く、動詞は自動詞で主語は名詞または修飾語句のついた比較的長い場合に限られる。非転倒例は 9 件、主語は全部代名詞、動詞は参考までに述べれば、自動詞 2、他動詞 2、複合動詞形 5 である。ここでも ‘there’ とよく似た傾向が転倒の条件について見られる。例文を挙げる。

- (1) 転倒例 : *Here* is my sone (46)/*heere* been nowe but we two (322)/*here* stondith at pe gate a poore man (284)
- (2) 非転倒例 : *here* it is (181)/*here* he sendeth the lin cloth (171)  
/ *here* I haue spokyn with a kyng (38)

§ 9 ‘after’ が頭位に来て転倒の起こる場合が 2 件、非転倒 21 件で、圧倒的に非転倒に向うが、前者では名詞主語に自動詞が用いられ、後者では主語に代名詞 12、名詞 5、動詞には自動詞 11、他動詞 6、複合動詞形 4（代名詞 2、名詞 2）となっている。これは表 6 のようになる。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	12
名 詞	2	5
自動詞	2	11
他動詞	0	6

表 6

つまり、大勢として、‘after’ が頭位にある場合非倒置に向うことになるが、なお名詞主語で自動詞のときわずかに転倒する可能性がある、と言える。例文を掲げる。

- (1) 転倒例 : but thenne *aftir* come an Erle (216)
- (2) 非転倒例 : *After* he goth to his owne paleis(86)  
/ *Sone after* pe stiward went to pe childe (323)/  
*Aftir* pe maister of pe Shippe wolde haue layn by the lady (88)



§10 頭位に ‘afterward’ が来た場合の転倒例 1, 非転倒例10で, ‘after’ 同様, 非倒置への傾向が圧倒的である。前者で, 主語は名詞で自動詞を用いてあるが後者では代名詞 3, 名詞 3, 自動詞 4, 他動詞 2, 複合動詞形 4 (名詞主語 4) である。これは表 7 となり, ‘after’ 同様, 大勢

	転 倒	非転倒
代名詞	0	3
名 詞	1	3
自動詞	1	4
他動詞	0	2

表  
7

は非倒置であるが, 名詞主語, 自動詞のときに, わずかに転倒する可能性があることになる。

(1) 転倒例 : then sone *afterward* was the day of the nativite of the Emperour (105)

(2) 非転倒例 : *Aftirward* he *comyth* to þe hous of þe Erle (86)/*afterward* þei *toke* him (179)/*Aftirward* the sone *was I-made* a knyzt (262)

§11 頭位の ‘anon’ では転倒・非転倒の比は 1 : 54 で, 転倒する割合は僅少である。前者では名詞主語, 自動詞で, この自動詞と共通の動詞 (come) で, 名詞主語を用いた対応例が 3 件後者に見出されるの見て, 転倒の可能性が薄いことがわかる。後者では, 代名詞 30, 名詞 19 で, 述部動詞は, 自動詞 13, 他動詞 36, 複合動詞形 5 (代名詞 3, 名詞 2) である。つまり名詞主語, 自動詞の場合に, ごく僅かに転倒の可能性が残ることになる。これは §§9, 10 にも見られたことである。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	30
名 詞	1	19
自動詞	1	13
他動詞	0	36

表  
8

(1) 転倒例 : *Anon come* hir syster sothefastnesse (133)

(2) 非転倒例 : *anon* the lion *come* (116) / *anon* the lady *come* ny (117)/and *anon* a Grehound, þe which he had lovid moche afore, *come* wyghtly rennyng to him. (79)/*anon* he *fond* a hous of marbill (7)/*anon* the yatis *shulbe shit* (63)

§12 ‘not’ が頭位に来て転倒する例が 1 件, 非転倒は 0 である<sup>8)</sup>。代名詞主語で他動詞でありながら転倒しているのは, 他の副詞(句)とちがい, 動詞との結びつきが強い否定語であるからだろう。

転倒例 : While I suffre and am in sekenesse, I woll lede þe life of religion, and of goode Rule, but while I was withoute such thraldom and sekenesse, *not lovid* I such life (271)

8) ちなみに, I shuld haue be robbid & yslayn, *ne had* my hound ybe (=but for my hound) では, 否定詞 *ne* のために転倒しているのではなく, 仮定文として接続詞を欠く場合, 転倒になるからである。cf. § 1.

§13 ‘now’ に続く転倒例は11, 非転倒29で, やはりこれも非転倒への傾きが大きい。前者に用いられた動詞be 1件に対し後者では同じ条件のものが6件あるのもこの傾向の強さを感じさせる。前者の主語については, 代名詞2, 名詞1, 後者で代名詞9, 名詞8, 動詞では, 前者において, 自動詞2, 他動詞1, 複合動詞形8 (代名詞7, 名詞1), 後者では, 自動詞9, 他動詞8, 複合動詞形12 (代名詞9, 名詞3) である。これは表9となり, 代名詞主語で自動詞という

	転 倒	非転倒
代名詞	2	9
名 詞	1	8
自動詞	2	9
他動詞	1	8

表9 条件が, わずかに転倒へ向う可能性をもっている。そして複合動詞形は非転倒への傾きを大きくさせる, と言える。

(1) 転倒例: A! der moder, *now is* woo to yow I-  
nowe (231)/*now go* I oute of the empire (45)/  
“*now know* y<sup>9)</sup> wele, pou canst thi pater-noster  
perfitly (73)/*now haue* I lost wif and childeryn(89)

(2) 非転倒例: and *now* he is dede (253)/*Nowe* the lawe was pat  
time, that eche woman shuld go to chirche (276)/& *now I am*  
*feble* (45)/*Now* oure fadir yede a pilgrimage (232)/*Now* pin  
fadir is absent(231)/now he wolde sle me(220)/*Now* an obstinat  
man *woll not take* hede (275)

§14 ‘rather’ で転倒例1, 非転倒0である。名詞主語で複合動詞形が用いられている。

転倒例: *Rathir shalle* the sowle *parte* from my bodye or I lese  
hit.” (185)

§15 ‘sometime’ で転倒例1, 非転倒0である。名詞主語で自動詞が用いられている。

転倒例: “*Some tyme is* such holiyng and perforacion goode. (10)

§16 頭位に ‘therefor(e)’ が来ての転倒例は31, 非倒置は171である。前者では代名詞0, 名詞27, 後者では代名詞85, 名詞24であり, 述部動詞は, 前者で自動詞0, 他動詞27, 後者でそれぞれ27, 82である。複合動詞形は前者で4 (名詞4), 後者で62 (代名詞54, 名詞8) である。ここでも, 興味深いことには, ‘then’ ‘po’ の場合と同様に, 伝達動詞 ‘say’ ‘speak’ の用いられた転倒文の多いことで, 転倒例中, 複合動詞形を除いて他動詞は全部これらの動詞なのである(say : 26, speak : 1)。そして用いられる文脈は, すべて同じで, 下に掲げる転倒例の最初に見られるものである。これらの動詞は, 非転倒例中には, 同じ文脈で, わずか3件にすぎず<sup>10)</sup>, この

9) この ‘y’ は ye ではなく一人称単数人称代名詞である。全テキスト中, この綴字はこの一件だけである。

10) 同じ say でも, 他の7例のうち6例は文脈が異なる。例: and, *perfore*, sir I say pat he is cause of my deth. (21) / and *perfor* I say, sste vp a cler myrrour…(241) 残りの1例は次頁の例文中にある。

therefore+say+名詞主語は、ひとつの formula（ありがたい聖書・聖者のことばを引用するのだから、話者をはっきりさせるため強調の後位に主語を置いたのであることは明らかであるが、‘then’ ‘po’ の場合に比べて、この formula から逸脱する割合が少いのを見て、前者の場合と違う特別な意図、感情がこめられていると、考えてよかろう）であると考え、別枠にして考えれば、どうであろうか。別枠のものを合計より除き括弧でくくると、表10のようになり、‘therefore

	転 倒	非転倒
代名詞	0	85
名 詞	0(27)	21(3)
自動詞	0	27
他動詞	0(27)	79(3)

表  
10

+say (speak)+名詞主語+聖書引用句’ 以外は、複合動詞形を除けば、すべて非倒置に向うことになる。そして複合動詞形についても、圧倒的に非倒置へ向うことになる。

- (1) 転倒例 : *Pe firste norise, that is sette to wasshe  
pe childe, is contricion, the whiche wasshithe  
away synne of man; & peref for seithe* Ambrose,

*Lacrime lavant delictum Quod pudor est Confiteri, ¶ This is to  
sey,teris wasshithe synne that is shame to be shewid (100)/and  
pere for spekithe seint Iame Apostle, Religio munda et...(249)/  
and perfore was made grete sorowe in pe cite (11)*

- (2) 非転倒例 : *perfor Holy Writ seith thus, ¶ Dic vbi sunt potentes  
...(57)/perfor salomone seiyth this, Ante hominem mors et vita...  
(304)/per for he(=christ) saide, Tanquam ad latronem existis...  
(179)/And therfore the Emperoure Spake to him, and saide(136)  
/and perfor it is wreten, ¶ Ierem. iii tu autem...(222)*

§17 ‘thereof’ が頭位に来る場合の転倒は7, 非転倒1である。ここでも ‘therefore’ と同様な ‘formula’ が前者で3件見られる。一応全体として見ると、前者で代名詞0, 名詞4, 動詞は、前者は自動詞1, 他動詞3（全部 say）である。複合動詞形では、前者は3（名詞3）、後者1（名詞1）である。‘formula’ を括弧でくくると表11のようになって、名詞主語で自動詞、または複合動詞のとき、転倒に傾くと言える。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	0
名 詞	1(3)	0
自動詞	1	0
他動詞	0(3)	0

表  
11

- (1) 転倒例 : *pe drynk is noute elles but passion &  
penaunce; & pere of seithe oure sauioire pus,  
Potesis bibere calicem quem Ego bibiturus sum...  
(107)/I was infecte with lepre, And per of com  
from me so abhominabil stench(326)/pere of was  
nothing I-spoke (163)*

- (2) 非転倒例 : *and perof this knyght, maister of pe ost, was hily  
gladid (89)*

§18 ‘thus’ の場合、転倒例 2，非転倒例は 4 である。前者では、複合動詞形（代名詞 1，名詞 1）のみが見られ、後者では主語に代名詞 4，名詞 0，動詞は自・他それぞれ 2 であり、複合動詞形はない。代名詞主語のとき非転倒に傾き、複合動詞形では逆に転倒に向う、と言える。

(1) 転倒例：And *thus shall the voyse thretin him* (218)/And *thus may ge welle preve...*(323)

(2) 非転倒例：and *thus he fulfillid his service* (105)/And *thus she become the spouse of Criste* (172)

§19 ‘tomorrow’ で転倒例 1，非転倒 0 であり、名詞主語、複合動詞形を用いている。

例：“*tomorrow shall be a turnament* (263)

§20 頭位に ‘wel’ が来た場合、転倒、非転倒例はそれぞれ 2，1 である。前者では代名詞 0，名詞 1，後者では代名詞 1，名詞 0 であり、動詞は前者で、自動詞 0，他動詞 1，複合動詞形 1（名詞 1），後者では他動詞 1 である。この双方に現われる他動詞は同じ ‘wit’ であることから、名詞主語と他動詞または複合動詞形で転倒に向う、ということになる。

(1) 転倒例：*wel wiste youre fadir what he ment* (169)/and *wel may the worlde be I-callid þe wyf of þe devil* (97)

(2) 非転倒例：*Wel I wote, pat ...*(73)

§21 ‘whereof’ の場合、転倒・非転倒例はそれぞれ 1，0 であり、前者は名詞主語、他動詞である。そして ‘thereof’ の formula と同じと見てよい文脈に用いられている。

例：þe hounde, pat is ... is the tong of a good Cristen man, þe which praieth continually, like a berkyng hound : *wherof seith holy Writ, Breuis oracio, scil. iusti penetrat celum* (47)

§22 ‘yet’ の場合、転倒・非転倒例は、それぞれ 4，18 で、非転倒への傾きが非常に大きい。前者では主語に、代名詞 2，名詞 0，後者では代名詞 9，名詞 1 であり、動詞は前者では自・代動詞各 1 ずつ、複合動詞形 2（名詞 2），後者では、自動詞 3，他動詞 7，複合動詞形 8（代名

	転 倒	非転倒
代名詞	1	9
名 詞	0	1
自動詞	1	3
他動詞	0	7

表  
12

詞 6，名詞 2）である。前者の動詞中、自動詞 1 は be であるが、後者では be が 3 件あるのも非転倒への傾きが大きいことをうかがわせる。代動詞 do を除いて表にすると、左（表12）のようになる。

つまり、代名詞主語で自動詞ならわずかに非転倒に傾く、また複合動詞形も同様であると言うことができよう。

- (1) 転倒例 : yf he had had an herte, he wolde have thowte on that lost; but *yit dude* he not (150) / (王が息子に向って最も怠惰なものに王国を譲ると宣言し、第一子が自分が怠け者である事実を述べる、続いて) “Nay,” quod the secounde, “*yit am* I mor worthi thanne thow (239) / “Neuertheles *zit shalt* pou not *fynde* me a foole. (38) / *pog...zit* is violence y-made to *pe* lord of *pe* hous (10)
- (2) 非転倒例 : *pog...zit* pou *didst* violence to *pe* dede (10) / & *yit* she *is* euermore contrary to my will (46) / and *yit* she *was* modir of both (90) / If...*zit* pou *shuldist* *haue* grace (312) / *pog...zit* *pei acusid* him to pilat (11)

§23 ‘as long as’, ‘as soon as’, ‘as often as’ と相関的に用いられて、主節の頭位に来る as, 時に so が形容詞や副詞を直後に惹きつけることがある (as long ...; as sone ...; as oft (times)

	転 倒	非転倒
代名詞	0	2
名 詞	2	2
自動詞	2	4
他動詞	0	0

表 13

... など)。その場合、転倒・非転倒はそれぞれ 4 件、7 件である。主語・述部動詞については表 13 のようになる。ただし、複合動詞形は前者では 2 (代名詞 1, 名詞 1), 後者では 3 (代名詞 3) である。これによって、名詞主語で自動詞の場合にかなり転倒する傾きがあり、そして複合動詞形ではやや非転倒に傾くことが多いと言える。

- (1) (非)転倒例 : as long as a man lokith in a myrrour, *as* long *is* *pe* ymage of him in his sight, but as sone as *pe* visage *is* fro the myrrour, *as-sone* *pe* sight of *pe* ymage *goth* away. so by hem; For als long as *pe* pouere man hath a good purs, *as* long thei *woll help*, but as sone as *pe* purs faileth, *pei* fleeth, and wol not be yhad (58) / as long as ... *as* long *may* the man *passe* Restfully by this world (108) / as long as ... *so* long she *was vnkaught* (70) / as ofte as she was I-temptid ... *as* ofte she *yede* and lokid (228)

§24 §23 で扱った以外に、‘so’ が頭位に来て転倒が起こる場合が 32 件、非転倒は 190 件である。全体としては、圧倒的に非転倒の方向に赴くことは明らかであるが、意味・用法によって、ほぼ六つに分けられると思う。次の区分内で、括弧内の数字は、転倒・非転倒の順に並べた件数である。

- (1) 「上に述べたような状態 (のまま) で」 (1—0)。

- (2) 「と同様に(ならって)…も」の意味で, *as...so*, *sith...so* のように相関的に用いられったり, あるいは意味の上で, 先行する等位節などがこの ‘*as...*’ の節に相当するものであり, 便宜上二つに分ける(22—17)。(a)代動詞 *do* や, 先行の文脈から省略されたものの推測が可能な助動詞と共に用いられるもの(12—0)。(b)ここには(a)のように *so* が代名詞的性格を帯びず, 副詞としての働きがより明確なものを含めた(10—17)。
- (3) (2)が「相応・類似」を表わすものであるのに対して, ここには, むしろ「同一」を表わすもの, 命令・願望などがその通り実行されたことの表現がそうである(3—23)。
- (4) 「だから」「そこで」と理由, 結果を表わすもの, と「そうすることによって」と条件を表わすもの(6: 122)。このほかに非転倒例しかもたないものが二つある。
- (5) 「それほどに」(0-1)。
- (6) 自動詞 ‘*hap*’ ‘*fall*=(*befall*)’ や *like* と共に用いられるもので後続の ‘*that* 節’ などに相応じるもの(0-13)。

まず(1)では, 名詞主語に自動詞が用いられている。非転倒の例はないのだから, このような条件のもとで, 転倒に向かう可能性が大きいと言える。

- (1) (一匹のひきがえるが騎士に復讐せんと, 寝所に入りこみ, 胸にとりつき騎士の生気を吸う。目をさました騎士は, 家来の助けをもってしてもこの悪魔を除けず, 我が命も終りか, と嘆く) *And so sat þe toode alle þat gere, and seeke his blood* (5)

(2)(a)でも非転倒の例はないから, 転倒例について述べれば, 転倒の可能条件を示すことになるであろう。動詞は代動詞 *do* が8(代名詞3, 名詞5)で半数以上を占め, いわゆる「本動詞」の省略された助動詞が3(*may*, *shall*, *has*), 助動詞(*must*)+代動詞 *do* が1で, 主語は4件とも代名詞ある。主語を強調するために後位に置いて対照的效果を出させるのであろう。動詞部が弱くてもそれは代動詞などが多く用いられていることからわかるように, すでに先行する文脈で意味内容が述べられており, 強調して繰り返す必要がないからであろう。

- (2) (a) *I see wel, and so may ȝe, that ...*(20)/*as þou wilt defende þe by thi strength, so shal I me by my wisdom* (55)/*as the body liuith by kyndly mete, Right so dothe the sowle by gostly mete* (100)/*the pekok goth lik a thef, and so do þei* (59)/*he ȝede aboute the Empire, and so most þou do, scil. go aboute the doynge of diuerse werkes of mercye* (147)

(2) (b) この場合には非転倒に大勢として傾くことは明らかであるが, まず前者では主語に代名詞4, 名詞2, 後者では代名詞・名詞はそれぞれ9と3であり, 動詞は自動詞(*be*)2, 他動詞4, 複合動詞形4(代名詞3, 名詞1)が前者で, 後者は, 自動詞(*be*)9, 他動詞(*dispose*, *quench*, *restore*)3, 複合動詞形は5(代名詞2, 名詞3)である。自動詞*be*については, 前者

で代名詞主語と共に用いられたのが1件、に対し後者では同じ代名詞主語でありながら6件あること、またこの動詞が名詞主語で用いられたのは前者後者とも同じ1件ずつであることは、非転倒への傾きの大きさを示すものであろう。

	転 倒	非転倒
代名詞	1(3)	9
名 詞	2	3
自動詞	2	9
他動詞	1(3)	3

表14で見ると主語が名詞より代名詞のときに非転倒に向う傾向が強く、動詞では、自動詞が優位であるが、転倒の4件の他動詞のうち3件 has 1件のほかが実は owe to+Root の owe が代名詞主語に先行しているのであって、他動詞にはちがいないが、後の ‘ought to’ が発達して来るのと相通じており<sup>11)</sup>、一種の助動詞とみなすこともあながち無理ではない、と考えれば、これを引き去って他動詞1 (括弧内はoweの件数) とした場合、他動詞より自動詞のときにわずかに非転倒に向かいやすい、逆に言えば名詞主語・他動詞で転倒に傾きやすいと言えるであろう。また複合動詞形においてもやや非転倒に向うと言える。

(2) (b)転倒例 : Also as focus lent to his sone oper ij d, Rigt so owe we to zelde to þe sone of goode will and meretory workis (32)/quod the emperour, “þat were impossible me to do.” “So were þat oper impossible for me,” quod he(66)/they wer worshipfully Reseyvid, but so wer not yowr [enmyes (105)/as ..., so is penaunce hard in sufferiŋg (146)/Right as a thinge is Raysid from þe erthe by hongynge, Right so is the synfulle Raisid fro synnys to god (146—7)

(2) (b)非転倒例 : as the see Ebbithe & Flowithe, so þe worlde is now Riche, now pore, now hole, now seke (108)/As my fadir hape ordeynid the kyngdom to me, so I dispose hit to yow(156)/right as it is hard to passe a depe water withoute a brig, So hit is hard to be saved withoute faith(41)/As water quenचितhe fyr, so almsdede quenचितhe synne (120)/as þe wif is weddid ... & may not departe, save only deth, So þi flesh may not be departid fro thi bonys, but by violence(34)/þe more he drynketh, þe more he thirsteth. And so hit is of worldly goodis, for þe more that a man hath of hem, þe more he covetith (64)

(3)について、転倒例では、主語は3件とも代名詞であり、非転倒例では代名詞7、名詞3である。動詞は、前者で so を補語的働きにさせている be、目的語と考えてもよい働きにさせている

11) OED の OWE の項5、および OUGHT 5b.

do と say の 3 件であり、後者では、同様な be 1 件（代名詞 1）と do 9 件（代名詞 6，名詞 3），複合動詞（過去分詞が文脈より推測できるから省略してある 1 例も含めて）13 件（すべて代名詞主語で So it was (done) の形をとる）である。言うまでもなく、(3)では非転倒への傾きが大きいことは明らかであるが、転倒例中 be や say と用いられた so には文脈からして他の転倒・非転倒例に見られない感情要素が入っており、またこの両者とも地の文でなく、被伝達文であることも、これらを別枠にして考えてよい根拠になるように思える。従って(3)では、転倒の 1 例 (so dude he) 以外は非転倒が原則的であると言ってよいであろう。

(3) 転倒例 : & yit she is euermore contrary to my will, & so is non but she.” (46)/The ferthe honoure was, þat he shulde sitte at the table with the Emperour, and so dude he; he sat in the temple of Jerusalem (178) (heは三つとも同一人物を指す)/“So sey I not to the.” (‘so’ は先行する別人の話の内容を指す)

非転倒例 : And thenne þe stiward was glad, and saide, “Late downe the corde;” and so he *dude*./false wrecche, þou shalt ... be hongid in ..., he shall haue ... þi londis, and be stiward in þi stede.” And so it *was* in dede, for þe stiward was y-hongid, and Gwido was set in his stede (290)/aftir my deth, she shall haue myn empire.” & so it *was ydo* in dede (52)/then the lady seyde he shulde be dede; & so he *was* in dede(175)/the Emperoure ... seide to his centurio, þat he shulde fecche that knyȝt, to torment to be demid and dampnid. and so he *was*. (241)

(4)「だから」と「そこで」とは必ずしもはっきり区分できない場合があるし、単に話題をおこす手段にすぎないこともあるので、これらをひっくるめて扱うが、ここでは、他のこれまでのどの区分よりも非転倒への傾きが大きいと言える。転倒例にあっては、代名詞 1，他動詞 (think) 1 で、他の 5 件は複合動詞形（代名詞 1，名詞 4）である。非転倒例では代名詞 62，名詞 27，動詞は自動詞 45，他動詞 44，複合動詞形 33（代名詞 18，名詞 15）である。複合動詞形の場合にごく僅か転倒する可能性があると言える。また他動詞 think を用いたものが転倒しているのは、その文脈では‘so’はほぼ‘then’に等しいし、‘Represented Speech’の一種を目的語としている(‘then’では‘Reported Speech’が目的語)点からも、‘then’に現われた think の 2 例 (§5 (7))と同じ一つの型とも考えられて、別枠にすることも可能であることを付言しておきたい。

(4) 転倒例 : he saide, “I aske þe Ien of alle the men þat seye my fadir turne the playse, þat þei be pikid oute.” & so *thowte* þei on aftir anoper, yf I sey so, myn yen shul be pikid oute.(154)  
/Resone, whiche is gostlye medisyne, is I-browte a-yene by the



werkes of mercy, and of conscience, & *so is* man *I-helid* (234)/  
 (混合例) The serpent, scil. *pe* devil, woundipe the grehounde,  
 scil. Resoun, ...; & *So is* *pe* blode [*sperkelid* aboute the cradil,  
 when *pat* *pe* vertus, *pe* whiche thow toke in baptisme, be  
 depressid & destroyed by the devill; & *so* *pe* cradil is tornid  
 vpsodowne, scil. to the erthe (100)

非転倒例: *perfore* it is beste that she late some leche dele with  
 hir, that she wold triste in; & *so* she *may* & *shalle* be hole.  
 (234)/(リア王の話) the Emperour had no place to abide ynne;  
*So* he *wrote* letres, ... to his first doughter (50)/he lesithe his  
 soule by synne, & puttithe it oute from the palys of hevene,  
 and *so* it goth fro dor to dor, as a corrupt and a filid virgine.  
 (145)/she tooke me to husbond; and *so* we *haue levid* euer ...  
 with Ioy and prosperite. (272)

(5)では代名詞主語に他動詞, (6)は代名詞主語13, 自動詞13である。

(5) I borrowed for thi love swich a some of mony ..., *so* hily I  
 sette myn herte in the.”(161)

(6) So hit felle in a tyme, that ther was a tiraunt namid Pom-  
 peius (219)/And *so* it *was* or tyme *pat* *pe* feste was don, alle  
 echon wer made his frendes. (105)/*So* hit *was*, *pat* the Emperour  
 entrid in to *pe* halle. (83) / the which emperour had thre  
 doughters. *So* it likid to this emperour to knowe which of his  
 doughters lovid him best (48)

§25 このテキストで、頭位にありながら、転倒を起こしていない副詞は次の通りである。先行文脈をうける *nevertheless* や他の散発的なものは別としていわゆる「文修飾副詞」の件数が、比較的多いのは、これまでに扱って来た副詞と異なり、先行する文脈とのつながりが比較的に薄く、前者が「前向き」の副詞とすれば、これはむしろ「後向き」のそれであるからであろう。なお括弧内の数字は件数を示す。

also(25); certainly(12); doubtless(9); eke(1); (or)else(12); ever(5);  
 fair(1); falsely(1); far(1); first(2); forsooth(16); forth(1); forthwith  
 (1); grievously (1); highly (1); iwis (=certainly) (1); much (1);

nevertheless(21); notwithstanding(1); ofttime(s)<sup>12)</sup>(9); outward(1);  
suddenly(1); someday(1); soon(10);<sup>13)</sup> soothly(= truly)(20); sore(1);  
thereby(1); therein(1); thereto(4); therewith(1); unnethe(= hardly)  
(2); verily(1); wherefore(2); yesterday(1)

§26 ここでは二語以上で綴られているが、意味上、普通の句よりはまとまりをなしていて転倒例のあるものを扱う。すべて「場所」を表わすものである。前項の中にある, forsooth, ofttime(s), therein, thereto, therewithなども二語で分けて綴られていることもあるが、転倒例がないことを、ことわっておく。(1) 'hereby' 転倒例 1 (名詞主語: 自動詞( run))。非転倒例 0  
(2) 'here beside' 転倒例 3 (名詞主語 3: 自動詞 3 (be, be, lie))。(3) 'here nigh' 転倒例 1 (名詞主語: 自動詞 (dwell))。(4) 'there beside' 転倒例 1 (名詞主語: 自動詞 (dwell))。(5) 'within' 転倒例 2 (名詞主語 2: 自動詞 2 (be))。(6) 'without' 転倒例 1 (名詞主語: 複合動詞形)。これらをとおして言えるのは, 'there' 'here' の場合と同様で、主語は必ず名詞、動詞は自動詞か、複合動詞形で転倒しているということである。ただし、複合動詞形では代名形主語も当然起こりうる。

- (1) *her by Rynnithe smale litle hogges* (209)
- (2) "*her be syde is my castelle*(220)/"*Here beside,*" quop he, "*lieth a knygt ded*,...(9)
- (3) *here ny duellith a knygt* (76)
- (4) *There beside duellid an heremyte* (81)
- (5) *and with Inne was but dede bonys* (305)/*And with Inne ben nothing but dede bonys* (305)
- (6) *And with oute was sette pis scripture, thei pat chese me, shulle* ... (300)

§27 ここでは、頭位に副詞句が来て、転倒になる場合を扱う。転倒・非転倒はそれぞれ79件、363件で非転倒への傾きは圧倒的である。複合動詞形の場合((転倒: 34 (代名詞 0, 名詞34。非転倒118 (代名詞103, 名詞15)を除いて、まとめると、表15となり、どの条件も非転倒への傾きを

	転 倒	非 転 倒
代名詞	0	179 (代動詞の主語 1を除く)
名 詞	45	65
自動詞	44	105 (代動詞 do 1件を除く)
他動詞	1	139

表  
15

を指すが、主語については、代名詞の場合には 100% 非転倒になるのに対し、名詞では 41% が転倒に向うことがわかるし、動詞については、他動詞の場合、100% に近く非転倒に傾くが、自動詞にあっては、先の代名詞主語に対する名詞主語の割合ほどではないが、やはり 30% が転倒に傾くことになる。つまり、複合動詞の場合は、圧

12) §23 と異なり, as や so と共に頭位に来ていないものである。 13) 12)に同じ。

倒的に非転倒に向かうが、単独動詞の場合、名詞主語で自動詞のときに転倒があることになる。また複合動詞形のうちで、転倒例34件中16件までは、‘Moralite’に現われる同じ表現で (e.g. *By þe Cite in þe Northe is vndirstond Helle*(22)) 一つの型であるから、これを別枠にして考えとすれば、複合動詞形で非転倒に向う傾向は更に大きくなる。

さらに、‘then’の場合のように、複合動詞の場合を除いて、転倒例と非転倒例に共通の動詞と同種の主語をもつものを対比すると、次のようになる。括弧内は、転倒・非転倒の順に並べた件数である。なお、転倒例は、複合動詞の場合を除いて、主語が全部名詞であるから、非転倒例からの算出もこの主語に限ることは言うまでもない。

(1) 自動詞 : be(22—6); come(8—8); dwell(2—1); enter(1—0); fall(2—0); go(1—1)<sup>14)</sup>; lie(2—0); play(1—0); reign(1—1); speak(1—1); stand(3—1)

(2) 他動詞 : speak(1—0)<sup>15)</sup>

これと言えることは、be で名詞主語の場合には、明らかに転倒に傾く割合が大きいということである。参考に、代名詞主語と用いられた上の諸動詞の件数をあげておく。

(1) 自動詞 : be (17); 〔come(7); dwell(1); enter(1); fall(4); go(5); lie(3); play(0); reign(1); speak(2); stand(0)〕

(2) 他動詞 : speak(0)<sup>16)</sup>

(1) 転倒例 : *and on his body is good armour* (9)/*in this hard cas come þe forsaide knyght Gerinaldus* (43)/*and in hir house dwelte a serpente of longe tyme* (242)/*and by this wyndwe enterith an Egle, scil. the power of god, which ...*(267)/*seven sithes in þe day fallith þe rightwise man* (74)/*And by þis wey goith many* (22)/*bisede the cradell lay the sarpent dede* (99)/*at this play pleieth vj. men.* (71)/*and aftir him Reignid the sone* (225)/*But a-yeinst suche a man spekiþ scripture, and seith thus, Maledictus homo ...*(320)/*Of that serpent spekithe moyses thus, Fac serpentem ...*(244)/*and azenst hit stod a man* (7)/*and vp on the finger was wretyn wordis percutē hic* (7)/*and euery nyȝt was lizt brennyng there in a lampe*(314)/ *a lawe, that aftir a dome yevin shulde be no mercye or grace* (242)/*than in the day of dome shalle the*

14) ‘yede’ の形で出ているものである。

15) 同じ意味・文脈で用いられた ‘say’ は2件ある。

16) 注15) と同条件の ‘say’ は7件ある。

wikid cook, scil. the devil, *stonde* aduersarie ayenste vs(152)<sup>17)</sup>/

(2) 非転倒例: And *alle that nyght* pes thre were in gladnes. (90)  
*In a tyme* pis sonne come to him(128)/And *in al this tyme* the  
Empresse *dwellid* with hir dowter (212)/*aftir his going*, a  
damsel, that was the ladies sarvaunt, *yede preveli* (227)/*aftir*  
*pe deth of the emperour* the yongist doughter *regned* in his  
stede (52)/*at pe laste* the knyzt *spake*, whenne he had long  
leyne, and saide ...(254)/*in pe last day of hem* pe maide *stoode*  
in a wyndowe (38)/so *in a certeyne tyme* the wyf of the Em-  
perour *saide* to him, “sir, ...(237)/and in *pe thirde day* he *ros*  
fro his deth (11)/*after þat* pe serpent was no more *y-seyn* (6)

§28 ここでは関係詞節内で転倒の起こる場合を扱う。転倒・非転倒はそれぞれ、25件、115件で、非転倒に傾くのは明らかであるが、詳細に見てみよう。前者において、主語は、代名詞0、名詞23、後者で代名詞34、名詞31であり、動詞は、前者、自動詞21、他動詞(say)2、複合動詞形2(名詞2)、後者では自動詞30、他動詞36、複合動詞形50(代名詞29、名詞21)である。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	34
名 詞	23	31
自動詞	21	29
他動詞	2 <sup>(18)</sup>	36

表  
16

つまり大勢は、非転倒であることは先に述べた通りだが、代名詞主語にあっては100%非転倒に向うことになるのに対し、名詞主語では過半数とまで行かずとも、43%が転倒に向かうことがわかる。また他動詞では非転倒に圧倒的に傾くが、自動詞の場合、ちょうど代名詞に対する名詞主語の関係と同じ位(42%)転倒に向かうと言えよう。複合動詞形にあっては、非転倒

に傾くことがはっきりと見てとられる。

転倒、非転倒に共通の動詞で、前者は名詞主語しかないから、それに限って拾い出してみると、前者でbeの占める割合が、23件中14件を占めるのに対し、後者では31件中わずか6件にすぎないことから自動詞でもbeの場合は特に転倒に向いやすいことがわかる。以下は、そのような共通動詞を列挙したものである。括弧内は、件数で、転倒・非転倒の順である。

(1) 自動詞: be(14—6); come(4—4); dwell(2—0); enter(1—1)

(2) 他動詞: say(2—0)

参考に、代名詞主語についても、このような動詞を拾い出すと次のようになる。

自動詞: be(4); come(2)

17) §5の最後から二つ目のパラグラフの例文との比較は興味深い。

18) 他動詞'say'は例文にも示したような、さきに'then'などの項で述べた一つの formula であると考えて、別枠にすると、他動詞の数は0となる。

なお前項§27の副詞句に掲げた数字を見れば、転倒の条件が非常によく似かよっていることに気付く。これは、次の例文にも見られるように、‘接続詞＋副詞句’の形に書き直すことのできるものが大部分であるからだ、と思われる。

- (1) 転倒例 : *pe Cite that is in pe north, where as is no mercy, but grete sorowe and care (20)/a foreste, in the which is a passing feire ladye(114)/Pe place wher comithe oute iiij. frogges is [the body of man, froo the which comithe iiij. qualites of humours, by the whiche iiij. sett together, pe ymage of pe body is dissoluid (111)(混合例)/the havene of the citee wher as dwelte hir modr (257)/The wyndowe at pe which enterith lighte(267)/the wey of penaunce & of fastyng; of pe which wey seith the Apostill, ¶ stricta est via ... (42) (同様の例, テキスト 126頁) /a philosopher, to whom weer I-putte iiij. sonys of a grete kyng, to be enformid (108)*
- (2) 非転倒例 : *the castell, wher as the body is of the Emperoure (254)/a crye of Torment, for the whiche cry many knyghtes come thidir to the cite. (96)/the door opyn, by pe which a ber entryth, scil. pe devill (267)/ Emperoure tolde hir in certeyne whoo was hir childe, wher thorow she was gladd (238) /gaderid frewte, & ete, thorow the whiche he was made a foule lepre. (189)*

§29 接続詞 ‘ne’ が頭位にきて転倒する例は 1 件、非転倒は 7 件で、非倒置の方へ圧倒的な傾きがあることは明らかである。前者では、主語に代名詞、動詞は他動詞である。後者では、代名詞 2, 名詞 1, 自動詞 1, 他動詞 2, 複合動詞形は 4 件（代名詞 2, 名詞 2）である。代名詞主語、他動詞の場合、または複合動詞形で非転倒に向うと言えよう。ただし、この転倒例では、‘ne we と続くことにあるためらいがあったのではないかということ、ne wite>nite, ne wiste>niste, ne wot> not のような、一つの熟した語ととられる音の連続を避けようとしたのではないか、と考えることもできる。

- (1) 転倒例 : *we sette not bye oper hevene, ne rekke we how long we bide in such derknesse of synne, and of thraldom;” (14)*
- (2) 非転倒例 : *they come neuer oute agayne, ne non of hir frendes myght know where they bcome (112)/she had no mater to playne, ne sopefastnesse had no cause to pleyne (135)/he come, and towchid not the shelde of the fadir ...; Ne he towchid not*

the shelde of the holy gost (236)

§30 接続詞 ‘than’ の導く節内で起こる転倒例は1件、非転倒は13件である。前者では名詞主語、代動詞であり、後者は代名詞2、名詞1；自動詞2、他動詞1、代動詞4（代名詞3、名詞1）、複合動詞形6（代名詞4、名詞2）である。後者の代動詞 do 4 件のうち 3 件が代名詞主語をもっていることから判断して、代動詞が名詞主語を伴うときに転倒の可能性があると見えよう。複合動詞形の場合は、もちろん非転倒に向うことになると言える。

(1) 転倒例 : þe deflouryng of this maide greved the emperour  
more *than* *did* the ravissching and withdrawing of her (42)

(2) 非転倒例 : þere was non that yaf better Counseill *than* the  
yong knyght *did* (45)/hit ... did mor harme *than* he *dude* afore  
(148)/I love the dowter ..., mor þan ye *wolle trowe* (160)/he ...  
wold be moore *than* his syr was (311)

§31 最後に扱うのは、接続詞ないし関係詞としての ‘as’ の導く節内における語順である。このような節内でも必ず非転倒の語順をとる次の意味・用法のものは、ひとつの型であるから、算入しないことにする。(1)「…のとき、…しながら」。(2)as...(a1)so の相関節。(3)「あたかも…のように」(4)関係詞の場合で such ... as となっている場合。(5) as often as ..., as long as ..., as soon as ...の節。

さて以上を除いた残りに見られる転倒、非転倒は、それぞれ50件、157件である。これを(1)「…のように」「…のままに」(46:132)と(2) as ... as の比較節(4:25)、の二つの場合に便宜上区分して見てみたい。(1)まず複合動詞形は転倒に1件(名詞1)非転倒には25件(代名詞23、名詞2)あるので除いてみると、表17のようになる。括弧内は転倒・非転倒例の内、名詞主語と用いられている件数である。

	転 倒	非転倒
代名詞	1	58
名 詞	44	49
代動詞do	27(27)	26( 5)
助動詞	3(2)	4( 1)
be	7(7)	15( 6)
特定の他動詞	8(8)	15(15)
その他の動詞	0	47(22)

表  
17

この表について、まず、「助動詞」とあるのは、先行する文脈からその省略されている本動詞が推測できるものをいう(転倒例では will 1, be 2；非転倒例では might, ought, shall, should 1件ずつ)。「be」とは、欠けている主格補語が先行の文脈から推測できるものも含める。「特定の他動詞」とは、‘say’ と ‘witness’ をいい、転倒例・非転倒例に共通に見られるもので、比較の都合上、別にしたものであり(前者・後者共に witness は1件ずつで、他は全部 ‘say’ が占める)、そしてこれら

は聖書や聖人の言葉を引用するのに用いられている。「その他の動詞」は、転倒例中に対応する

ものがない動詞をひっくるめたものであり、代名詞主語では自動詞17, 他動詞 8, 名詞主語ではそれぞれ11である。

この数字でわかることは、代名詞主語はまず 100%近く非転倒に向うこと、名詞主語ではほぼ同じくらいの割合を両語順が占めること、また動詞については、代動詞 *do* が両語順に同じ割合であること、「be」も「特定の他動詞」も非転倒の方に割合が傾いていること、である。しかし聖書などの語句を quote するときの「特定の他動詞」による語順の大勢が §16の ‘therefore’ の場合とは逆であるのは何故か、という疑問は残る。

(1) 転倒例 : *perfor, man do as dyd þe knyte(7)/þer is no iogoloure pat can make me so fast lawe, as woll my sone(46)/þe serpent stirte in to it, and was drawyn vp as were þe oper (283)/many ben vnkynde, as was þe þefe that deceivid þe lady(321)/By the wif ... is vndirstond the flesshe ...; as seith the Appostill paul, Datus est michi ... (48)/he yede ...; mevinge, as is manner of playe, that ...; and perfor, as costom was, a clene virgine shulde arme him. (236) (混合例)/prelatis of holy chirche, as ben prechours, and confessours (16)*

非転倒例 : *if he be sory for his synnys, as blind men ben for hire dorknesse, he shall have ... (36) if pou sey soth, as þi felaw dede, ywis pou shalt ... (73)/he ... askid a devorce, as the lawe wolde (176)/may ye drinke of the same cuppe pat I am to drynke, scil. suffre passion as I shalle (205)/hit is of hem as hit is of a man that lokith in a mirrour (58)/as lawe was, he yafe iij. strokes on the yate (104)/he ... & is ouercome with the devil; as the spostle seithe, Nullum Opus ... (126)/he berith hem as ..., or as men berith poudir in þe wynde (42)/but she, as a goode woman shulde do seide ... (312)*

次に(2)であるが、転倒、非転倒、それぞれ4件と25件である。複合動詞形は前者にはないが、後者には6件(代名詞3, 名詞3)ある。これらを除いてみると表18ようになる。括弧内の数字は表17におけるのと同じものを示す。

「be+C」とは(1)における「be」と異なり補語が表現されているもの、「その他の動詞」は自動詞 *enter* で、これも「be」同様、主格補語が先行文脈から推測されるものであるが、一応別にした。

この表から、主語については、代名詞は、(1)と同様 100% 非転倒であるが、名詞は転倒への傾きがきわめて大きいと言わねばならない。代動詞 *do* や「助動詞」が転倒例には全く見られない

	転 倒	非転倒
代名詞	0	17
名 詞	4	2
代動詞do	0	4
助動詞	0	5
be	3	1
be + C	0	6(1)
have	1	2(1)
その他の動詞	0	1

表  
18

ことは、これらがみな代名詞主語であるところに理由があると思われる。例えば *as much as did he (will he)* という語順は避けていることになる。「be」が転倒例に多いのは、名詞主語のせいで、*as ... as is (was, etc.)* + 名詞の語順を好むと言えよう。事実非転倒の例は代名詞主語なのである。「be + C」であるが、補語の表現された *be* は、*as ... as is (was, etc.)* + 主語 + 補語 (*worthy, good, etc.*) という語順をとらないことになる。「have」が非転倒に 2 件あるが、1 件は代名詞主語であるからだろうし、残りは名詞主語であるが *have need of* という動詞句になっているから転倒しないと思われる。

- (2) 転倒例 : *if ye have feith, as moche as hath þe corn of synewey* (41)/*yf ther be eny sorowe as is my sorowe* (223)/*heven was fro helle as moche as is a sighyng fro þe hert* (65)
- 非転倒例 : “*doughter, how moche lovist pou me;*” *As moche forsooth,*” she said, “*as I do myself.*” ... he seid to the thrid doughter, “*how moche lovist ... me?*” “*Forsooth,*” quod she, “*as moche as ye beth worthi, & no more.*” ... “*doughter, thou shalt not be married so richely as þi sustris beth.*” (49) (リア王の話)
- /as moche quantite as Gwido hadde nede of to charge with his asse* (286)/“*Aske of me,*” quod the knight,” *as mucche mony as thowe wolte* (162)/*paide to him as mucche as euer he wolde aske* (246)/*praied him to be ... in as moche as reason wold suffre.* (43)

§32 最後に、次のような例が一つだけ見出されたが、これは動詞の前に、このテキストにおいては、通常 ‘there’ が加えられるものである。‘there’ がいないために ‘come’ という動詞は頭位に立ち、‘there come ...’ よりも生き生きした表現になっている。Chaucer の *Nun’s Priest’s Tale* (3375 以下) で雄どりをくわえて逃げ去る狐を追いかける場面があるが、それを思い出させてくれる (*Ran Colle oure dogge, and Talbot and Gerland/ ... /Ran cow and calf, and eek the verray hogges/...*)。

例 : *Thus as mercy & sothfastnesse wer together in strif, come the thirde dowter, scil. Rightwisnesse* (133)...(*as*=when, while)



§33 以上、転倒の条件を個々の頭位に置かれる語句について単独の動詞を中心に調べて来たが、(1)このテキストの大部分を占める非転倒のいわゆる‘Actor-Action-Goal’の語順のために、主語と動詞との間はいうまでもなく、動詞と本来副詞的な要素である目的語や補語も、できるだけ互いに近くにあってこの語順に従おうとするので、自動詞に比べて他動詞は目的語との間に主語などを介在させること(VSO)をきらって転倒にはなりにくい。自動詞(とくに‘copula’ be など)は、補語が頭位にあればそれに続いて置かれて、名詞主語を従えることがかなりある。

(2)転倒の語順において、名詞主語が代名詞主語に比べて比率上多く見られるのは、そこに意味のリズムの強弱の意識が働いているからであろう。つまり頭位の語句に強のリズムが働くのは認められている考えであって、次の中位に他動詞でなく‘copula’の働きをしている自動詞(とくに be)や代動詞が入ってくるのは、意味の weight が弱く、弱のリズムを受けることができるからである。そして次に代名詞より意味の重い名詞が来れば強のリズムを引き受けこれで強弱強のリズムができることになるのである。このような、意味のリズムは、単に自動詞の場合だけでなく、助動詞が来ても同じである。複合動詞形がかなり転倒例にあるのもそのためであろう。頭位の語句を‘H(ead)’とすれば、H—自動詞—名詞、H—代名詞—自動詞(他動詞)、H—助動詞—主語(名詞、代名詞)—動詞、H—助動詞—動詞—主語(名詞)、H—助動詞—助動詞—動詞—主語(名詞)、H—助動詞—(代名詞、名詞)主語—助動詞—動詞、といった語順ができてくる。これらは単純に羅列したにすぎず、名詞の前の冠詞も軽微ながら弱のリズムを受けもつこと、いわゆる euphony, cacophony の問題、また、数箇所に見られた‘formula’ないし‘mannerism’などの文体の問題も残っている。(3)このテキストは、その統語法において、未だ、今日の英語と比べてなお洗練されていない点があるが、口語体的な要素が多いためか、Chaucer などの散文に見られる長文は比較的少く、かなりきびきびした文の流れがあり(‘Moralite’は必ずしもそうとはいえない)、近代英語を思わせるのであるが、にも拘らず、古いという感じをもつのは綴字や一部の用語のためだけではない、転倒語順の量の大きさもそのような感じをかもし出す大きい要素の一つであろう。後期MEにおいて、転倒も含めて他の語の配置がいかに近代化に向って流れていったかを探る、これは肌理のすこぶる荒いひとつの試みにすぎない。